● 読書感想文コンクール　中学校の部 ●

優秀賞

田村　萌香（たむら　ほのか）　浅川中 ２年生

作品名：走れメロス
図　書：走れメロス

「私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生まれてはじめて、君を疑った。」

私が中学生になってから読んで、この物語の中で一番共感することのできたのはこのセリヌンティウスの台詞です。

『走れメロス』は、小学生の頃から何度も自分で読んだり、両親から読み聞かせをしてもらったりしてきたものです。でも、中学生になり改めて読み返してみると、私はメロスのことよりも、セリヌンティウスのことが気になりました。

バレー部に所属している私は、部活を通して親友ができました。その子とは、部活のことはもちろん、勉強のことや学校生活のことも、何でも話し合えるようになりました。

メロスとセリヌンティウスのように、竹馬の友とはいきませんが、それでも親友と呼べる信頼できる友達になりました。

でも、親友といっても、やはり口に出していえないこともあります。「何でも相談できないから、それは親友とはいえないのかもしれない。」と、友達を裏切ってしまったような気持ちになることもありました。

この物語を今まで読んできた感想では、「信じてくれる相手のために、何が何でも王城に戻る、親友と約束を守る立派な男。」「相手のことを信頼して、命も預けて、素晴らしい男。」とだけ思っていました。でもこうして中学生になって、親友ができたのに、やっぱり、打ち明けれらないこともある。と悩んでいた私にとって、「ちらと君を疑った。生まれてはじめて君を疑った。」とセリヌンティウスが謝ったのを読んで、ほっとしました。何だ、私もこのセリヌンティウスもそれ程変わりがないことに安心したのです。

親友だからといって、ウソも隠し事も全くなく付き合う、ということが当たり前なのではなくて、悩むことがあっても、最後には相手のことを信じることができる、

相手を信じるという自分に自信がもてるということが大切なのだと思いました。
　私が、あんなことを言ったら、こんなことを考えていたら、友達にどう思われるだろうと、くよくよと悩んでいるのとは違って、セリヌンティウスは、たった一度だけ疑った後は、心を落ち着かせて、ただひたすら友の帰りを待っていたかと思うと、本当にうらやましい気持ちになりました。また、メロスとセリヌンティウスのように、お互いの疑った気持ちを正直に打ち明け合い、水に流していくことのできるような親友を、これからはつくっていかなければならないということも強く感じ取りました。
　全く疑いもなく、ただひたすらメロスの帰りを待っている物語では、私にはウソくさい、偽善的な物語となって、中学生になってから読んでも、反発しか残らなかったのではないかと思いました。
　私は、親友に限らず大勢の友達が「萌香さんなら、信じることができる。」と自信をもって待っていてくれるような、信頼のおける友達関係を築いていきたいと思います。そして、私も、友達のことを自信をもって待ち続けることのできるよう、自分自身を見つめ直しながら高めていきたいと決意しました。